

その②——働き方、これまで、そして今から——
ここでは、研究内容とは別の事を長々と語りたと思います。



経歴は以下になります。

1989年4月～1993年4月

会社員、一般職、工場内勤の事務員

|

——この間「人生いろいろ期」とよんでいます——

|

1999年4月～2004年3月、岡山大学 農学部（休学を含む）

2004年4月～2006年3月、岡山大学大学院自然科学研究科 博士前期課程

2013年3月、博士（学術 論文）、岡山大学大学院自然科学研究科

2006年4月～2013年3月

独立行政法人 放射線医学総合研究所 分子イメージング研究センター、千葉市

2006年4月～2013年3月、准技術員 → 研究員

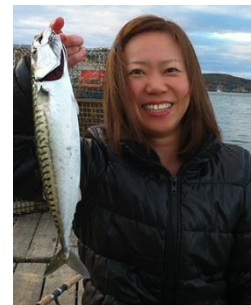
2013年5月渡米、2015年10月まで Job hunting@ME, USA

2013年11月～2015年8月 The Jackson Laboratory, ME, USA

2013年11月～2015年8月 Research Assistant → Post-doctoral

2015年10月～2017年3月

株式会社テクノプロ 勤務場所：アステラス製薬つくば研究所、
つくば市、技術職



2017年4月～2020年3月

日本学術振興会特別研究員、東京大学 農学部 獣医薬理学教室、文京区、PD

2020年4月～2020年9月

東京大学 アイソトープ総合センター、文京区、特任研究員（1日/週）

2020年4月～2021年3月

国立研究開発法人 理化学研究所 脳神経研究センター 神経動態医科学連携チーム、和光市

2020年4月～2021年3月、研究パート I（4日/週）→テクニカルスタッフ I

2021年4月～2023年4月

東京大学 定量生命科学研究所 クロマチン構造機能研究分野、文京区、学術専門職員

2023年5月～2023年12月

国立研究開発法人 量子科学技術研究開発機構 分子イメージング診断治療研究部、千葉市、
主任研究員

2024年1月～

東京大学 アイソトープ総合センター、文京区、特任講師

あれれ、なんかこの人大丈夫？と思われるかもしれません。高卒で会社勤めの後、空白期間もあります。大丈夫です。色々な立場を身を以て経験し、なんでも体当たりで楽しんでいます！

考えるだけでもワクワクする研究。でも、自発的なオリジナル研究を続けるなんて容易いことではありません。思いやアイデアが湧き出しても自分の考える研究は出来ないことの方が圧倒的に多い（私の場合は）。なぜなら、年齢という数字の壁、職位の問題、予算の獲得、これらに引っ

掛かり上手くないことが多いから。なんて素晴らしい研究、なんて世の中に役立つ研究！…自分ではそう思っても辛口コメントに撃沈したり、予算の“応募資格”が得られない辛い立場になったり（後述）。良い研究をして良い論文を出してまた予算を獲得して…という、そんな成功を絵に描いたような凄い波には、私は乗れずに溺れてしま……………

……………わずに、何故か沈みかけては浮き輪が飛んでくる“沈まない運命”がまたやってきます。だから、研究紹介に書きました“断続の「断」と「続」”を繰り返すのかもしれませんが、よく、浮こうと思うと沈み、潜ろうと思うと浮くと言いますが、私の場合、もう自分の研究出来ないんだ…これで満足しなきゃ…と下を向いていると、浮き輪が飛んできます。けして助け船ではなく空気玉。掴んだら吸って吐いてしまうのではなく浮いているうちに苦しくても研究チャンスをものにする。今回で何回目なんだろう？

きっと、「断」に入る時はどんなにやる気に満ち溢れていても、違う！ダメ！とマウスから「断」が導かれていて、今面白いじゃんやってみなよとマウスからチャンスを与えられ「続」になる…マウスのソウルというかマウスがコントロールしてくれている、そんな風にさえ感じています。

先述の応募資格の話。この世知辛い研究社会、年齢やら雇用財源やら職位やらの理由で研究費の応募そのものに参戦すら出来ないことが圧倒的なのです（あくまでも私の場合は）。大学も研究所もテニユアは一握り。任期任期中で転々と移動せざるを得ません。よくまあ今のところ食い繋いでいます。ポジティブに考えればそれが良いことに溢れていることも事実。何より出会いは宝だし、そして勉強になる。全く違う研究を経験すると確実に視野・思考、そして技の拡大があり、これは本当に素晴らしいものです。でもやっぱり。任期や雇用財源の壁に疲弊し、不安を纏いながら過ごすよりも、落ち着いて腰を据えてじっくり研究したいのが本音。不安や応募資格の喪失は研究の妨げ以外何物でもありません。そして、年齢という数字が全てのチャンスを奪ってゆく、これは現実で抗いようがありません。

———なげかけ———

例えば、様々な研究費申請、圧倒的に多い若手応援枠があります。何歳以下、博士取得後何年以内。ただし「育児または介護の理由により離職した場合はその期間は猶予する…」

ん……………。

若手の定義を定めるにあたり離職期間に含めない猶予期間の条件。これも、なぜ育児と介護だけが理由として認められるのかしら？なぜ人生の休憩や他の世界の見学はダメなのかしら？なぜ研究を継続していることが前提なのかしら？———研究から離れるにあたり認められる理由と認められない理由って…国や企業が決めちゃうの？？？———そもそも理由が無くてはいけないの？———

精一杯アプライしても次のポジションが得られなかった、違う業種に転職した、単純に退職した、家族の勤務先について行くから辞めた、健康問題で一旦離脱 etc…人それぞれだと思うのです。意に反して継続できなかつたり中断した研究者は参戦してはいけないの？

若手枠というものはあって然るべき良い制度だと思います。でも、波に乗れなかったシニアさんもう不要ですよ、そんな研究には価値ありませんよ、若者に譲って下さいって、国や社会に捨てられたみたい。引き際や譲りとはまた違って、やってみよう精神や考えに対してはフェアであって欲しい。

国は年金受給年齢の引き上げをするかもしれませんが、特殊な職業で無い限り、仕事を得続けるって大変なのに、現役で頑張らねば生きて行けなくなるかも知れません。それなのに、実際は研

究業界から肩を叩かれているも同然・・・本当に大変。でもだからこそ、そんなことどこ吹く風で、頑張る 50 代のロールモデルとしても歩きたい（走るのは疲れるので）。多くが不思議にも思わず“こんな歳になっちゃったー”なんて悠長な事を言って受け入れる規則や制度ですが、私には不思議に思えることがいっぱい。不思議の中を歩いています。

色々なことも経験しつつ。働き方に、Life work, Rice work という言葉が出てきますが、それを地でいっています。そして、Life も Rice も研究は楽しく、当然どちらも Like work な私です。

——座右の銘——

為せば成る、為さねば成らぬ、何事も、成らぬは人の為さぬなりけり
笑う門には福来る